

シリーズ太平洋戦争開戦 80 周年 座談会

第 2 回「太平洋戦争における軍事的転換点」

(防衛研究所の研究者による座談会、2022 年 5 月 31 日)

防衛研究所は、昨年 12 月に「太平洋戦争を語る」と題して実施した太平洋戦争開戦 80 周年座談会をシリーズ化して、第 2 回座談会を実施しました。

今回の座談会では、齋藤雅一所長、立川京一室長（戦史研究センター戦史研究室）、齋藤達志所員（戦史研究センター史料室、2 等陸佐）石丸安蔵所員（戦史研究センター戦史研究室、2 等海佐）及び小椿整治所員（戦史研究センター国際紛争史研究室、2 等空佐）が、「太平洋戦争における軍事的転換点」というテーマで、それぞれの専門の視点から語り合いました。



(左から、立川室長（司会）、齋藤所長、小椿所員、齋藤所員、石丸所員)

1 趣 旨

【立川】昨年 12 月に太平洋戦争開戦 80 周年企画として「太平洋戦争を語る」と題して座談会を行いました。おかげさまでご好評いただき、その続編をとということで、この度、座談会をシリーズ化して企画することになりました。

今回はその最初と申しますか、前回を含めると第 2 回ということになりますが、「太平洋戦争における軍事的転換点」というテーマで語り合いたいと思います。本日の出席者は、史料室の齋藤所員、戦史研究室の石丸所員、国際紛争史研究室の小椿所員です。最初に、議論の前提と申しますか、テーマでございます「軍事的転換点」をどのようにとらえるかといった点について、どなたかご発言をお願いいたします。



2 軍事的転換点をどうとらえるか

【小椿】 それでは私から話をさせていただきます。本日のテーマである「太平洋戦争における軍事的転換点」については、そのとらえ方がいくつかあるように感じられます。

一つは、戦争の勝敗の潮目が決定的に変わった、すなわち、攻勢作戦が防勢作戦へと変化を強いられた作戦に絞り込む場合、もう一つは、太平洋戦争全般を通して軍事的な潮流の大きな変化、局面とでも申しましょうか、これをいくつかパターン化して区分するものがあるように思われます。



一般的に、転換点といった場合には、前者の場合がよりイメージとして受け入れやすく、ミッドウェー作戦およびガダルカナル攻防戦を思い浮かべられると思います。欧州戦線ではモスクワ攻防戦やスターリングラード攻防戦が同様のイメージです。一方で、後者のように、戦争をいくつかの局面でとらえると考えた場合、その分け方は、個人では相当差があると思います。

私の場合は4つに分けました。①「日本による攻勢期」（～昭和17年4月）、②「米軍による阻止期」（5月～昭和18年2月）この期間はミッドウェー作戦、ガダルカナル島攻防戦の時期です。次に、③「日本軍後退期」（～昭和19年6月）、昭和19年6月、これはちょうどこの頃にサイパンをめぐる戦いが発生した時期です。それから、最後は、言葉として、非常に表現しづらいのですが、④「敗残期あるいは敗退期（～終戦）」としました。

今、申し上げました4つの区分における②の阻止期は日本軍が開戦当初に成功した南方進攻作戦終了後、更なる攻勢作戦をとったわけですが、これを米軍が阻止したフェーズとしました。

それから、③の後退期は、日本にとって完全な防勢期としました。ただし、この期間においては、日本も戦局逆転の期待も完全には捨ててはいなかった時期と考えています。

そして、最後の④の時期は、昭和19年6月以降終戦までの期間です。この期間において、捷号作戦等がありましたが、日本海軍の中核は既に失われておりました。太平洋戦争では制海権をめぐる戦い、当然そのために制空権も必要なわけですが、これが戦争の主体であったと思います。この制海権を失えば、南方資源地帯からの石油をはじめとした資源輸送はままならなくなります。米国による石油禁輸が開戦の一因であったことは周知のとおりです。その意味で戦争の鍵となったのは、日米の機動部隊の盛衰でした。日本海軍が正規な形態での機動部隊による米機動部隊への戦闘は、昭和19年6月のマリアナ沖海戦が最後でありました。この海戦での敗北は、日本の敗戦を決定的なものとしたと考えられます。この海戦の敗北によりサイパンを含むマリアナ諸島の陥落は必定となり、ここから

の B-29 による本土空襲は日本の国力の凋落に拍車をかけることとなりました。そして、日本の機動部隊は、以後の局面では再建されることはありませんでした。最後の局面とした昭和 19 年 6 月から終戦までにおいては捷号作戦等が実施され、そこでのレイテ決戦は天王山と総理より声明されましたけれども、日本海軍の水上部隊は実質的に機動部隊のないイレギュラーな形態（おとりとしての機動部隊が参加したが）であり、基地航空部隊と地上部隊、これを主体とした抗戦しか、この時期には手段は残されていませんでした。結果的に最後の局面においてはいかに米軍に出血を強要するか、という点に絞るほかなかったわけです。正確なデータとしては覚えてはおりませんが、この局面、昭和 19 年 6 月以降の約 1 年だけで市民を含めた日本側の死者は全戦争期間の 8 割以上を占めていたのではないかと認識しています。そういう意味で敗残期あるいは敗退期と私は理解しています。

【石丸】今、ご指摘のあったように、戦争の勝敗の潮目が決定的に変わった事例として、ミッドウェー作戦が取り上げられました。私もそう思うのですが、日本海軍が明治以降、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦などを通じて築きあげてきた海軍の作戦を軸に考えると、ミッドウェー作戦という大きな潮流の変化は、すでに太平洋戦争の開戦時に実施したハワイ作戦をきっかけに起こっているように思います。そういった視点で考えますと、開戦時に実施されたハワイ作戦も、また、大きな軍事的転換点であったように思います。



【齋藤】先ほど、小椿さんが制海権をめぐる戦いといっておられました。やはり太平洋における戦いは、シー・パワーの戦いといえるのではないのでしょうか。つまり、太平洋の島嶼を占領し、また、飛行場からエア・パワーを発揮するためには陸軍が必要です。しかし、考えてみると、この陸軍、エア・パワーをその島まで輸送して、補給を継続させるためには海軍力を中心としたシー・パワーが必要となります。マハンは、「海上交通路はシー・パワーによって維持される」といいましたが、このシー・パワーの優越を獲得したほうが太平洋という広大な戦場のなかで主導権を獲得できるといえるでしょう。シー・パワーの転換点が軍事的転換ともいえるのではないのでしょうか。



当然ながら、ハワイ作戦、珊瑚海海戦、ミッドウェー海戦と、日本海軍と米海軍は激戦を交えてきましたが、シー・パワーという観点からするとその大勢が決したのは、ガダルカナル攻防戦のなかで生じた、昭和 17 年 10 月 26 日の南太平洋海戦であり、この海戦が太平洋戦争における大きな軍事的転換点の一つと考えております。

【立川】先ほど、石丸さんから、ハワイ作戦も軍事的な転換点であるとのことのご意見がございましたが、具体的にはどのような点において転換したといえるのでしょうか。

3 戦い方という視点で見た転換点

【石丸】はい、ハワイ作戦は、航空機により真珠湾内に停泊している艦船等を攻撃し、戦果をあげることに成功しました。しかしながら、日本海軍は、それまでずっと洋上における艦隊決戦を想定していました。太平洋戦争が始まるまで、毎年、作成していた「海軍年度作戦計画」は、艦隊決戦を中心に計画していました。

ところが、太平洋戦争開戦時に実施されましたハワイ作戦は、航空機が中心となって展開されたといえるでしょう。これは、日本海軍が長い間、訓練を実施してきた艦隊決戦とは大きく異なっており、軍事的な転換点といえるのではないのでしょうか。

ハワイ作戦の直後、12月10日に実施されたマレー沖海戦においては、日本海軍の航空機が、英海軍の戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」と巡洋戦艦「レパルス」を攻撃し、撃沈することに成功しており、航空機が洋上を行動中の戦艦を撃沈した最初の事例として、その重要性を認識させることになりました。

ところが、航空機の活躍と正反対な運命を背負ったのが、潜水艦です。第一次世界大戦を通じ、新しい兵器として登場したのが航空機と潜水艦でした。太平洋戦争を前にして、米海軍に対し劣勢であった日本海軍は、潜水艦を有力な補助兵力として認め、潜水艦の整備に努めていました。潜水艦の任務としては、米海軍の主力艦隊に対し、その根拠地の監視、出撃後に追跡し、奇襲による攻撃を実施するなど、艦隊決戦の補助兵力として考えていました。潜水艦による敵根拠地の監視と、敵艦隊の追跡が、日本海軍の邀撃作戦を成立させるために必要だと考えられていました。ところが、ハワイ作戦において25隻の潜水艦がオアフ島周辺に投入されたのですが、敵の厳重な警戒のため、確実な監視や追跡を実施することが困難であることがわかりました。

その後、太平洋戦争中に、潜水艦の用法に画期的な変革はなく、作戦思想の転換が必要であると潜水学校から提言が出されたのは、昭和19年2月になってからのことでした。このように日本海軍に、新しい兵器として登場した航空機と潜水艦は、全く違う運命をたどったといえます。日本海軍の潜水艦部隊と正反対だったのは、米海軍の潜水艦部隊です。米海軍の潜水艦部隊は、海上交通破壊戦に使用され、日本の海上輸送に対し大きな損害を与えました。その結果、日米の潜水艦部隊の間で、大きな戦果の開きを生ずることとなりました。

戦後になって、米海軍太平洋艦隊の司令官チェスター・ニミッツ提督が、日本海軍の潜水艦の運用法について「主要な武器がその真の潜在能力を少しも把握理解されずに使用さ

れた稀有の例」であると酷評しています。

【立川】日本は第一次世界大戦において、戦場のリアルを経験しなかったといわれています。その第一次世界大戦において、新兵器として登場した航空機と潜水艦、これらの新兵器が登場して、当然、その用法も変わってきましたが、太平洋戦争において、第一次世界大戦の経験が日米間の差となって出たということなののでしょうか。

しかし、日本海軍は第一次世界大戦の際に、地中海に艦隊を派遣して、潜水艦による攻撃で損害を被っているのですが、それが教訓として生かされなかったということは強調しておきたいところです。

【所長】通商破壊作戦というものが日本海軍に定着していなかったのではないのでしょうか。ゲームチェンジャーというものが非常に大きな話題となっていますが、第二次世界大戦当時においては、ゲームチェンジャーはおそらく航空機と潜水艦という理解ですが、航空機については最大限活用でき、一方、潜水艦は活用できなかったと考えられます。なぜその差が生じたのでしょうか。



【石丸】その差が生じた原因について思い浮かぶのは、強力な指揮官の存在です。連合艦隊司令長官であった山本五十六は航空兵力に対しすさまじい情熱をかけ、自分の作戦を主張し、実行しました。ところが、潜水艦部隊の指揮官にはそういった指揮官がいなかったように思います。その結果、艦隊決戦の補助兵力というところから抜け出せず、作戦思想の転換の必要性が提言されたのは、昭和 19 年 2 月になってからで、時すでに遅しという状況でした。

【所長】齋藤さんが転換点として南太平洋海戦を挙げられておられましたが、戦術的には五角だったといわれています。具体的に説明していただけますか。

4 シー・パワーの転換点としての南太平洋海戦

【齋藤】海軍のシー・パワーに掩護され陸軍の南方作戦は、第 25 軍によるマレー半島上陸作戦からはじまりました。この作戦における上陸作戦は、陸軍が研究を重ねたもので、制海権、制空権を確保した上で、隠密に、努めて、夜間を利用して行われ、成功しました。

しかし、昭和 17 年 3 月 8 日、海軍南洋部隊による東部ニューギニア、ラエとサラモアへの上陸作戦以降、雲行きが変わります。ポートモレスビーを基地とする航空機、空母か

ら飛び立った艦載機が輸送船など多くを沈没させます。つまり制空権が敵にあったのです。

このため、海路からのポートモレスビー攻略作戦が計画されましたが珊瑚海海戦が生じたため、作戦は中止となります。その後、ミッドウェー海戦となり、4隻の空母を失いますが、当時、まだ全体としての海軍戦力は日本の方が優勢でした。

そして、8月7日、ガダルカナル島に米軍が上陸、20日には航空機が配備され、同島からのエア・パワーが発揮されます。

ミッドウェー海戦で、ミッドウェー島からのエア・パワーにより多大な損害を被り、その怖さを知った連合艦隊は、飛行場のある島へは近づかなくなりました。つまり、陸軍の上陸作戦を十分に掩護しなくなったのです。このため、海軍は、駆逐艦による鼠輸送で兵員をガダルカナル島に上陸させますが、やはり輸送船をもって重戦力を揚陸しないと陸上戦は成り立ちません。そのため、10月に輸送船団（輸送船6隻）を送り込み、第2師団による総攻撃を計画します。結局、この輸送船団も米軍のエア・パワーの餌食となりますが、ここで生じたのが10月26日の南太平洋海戦でした。日本の機動部隊（第3艦隊）は、空母4隻、戦艦4隻に対して、米海軍は空母2隻、戦艦1隻と劣勢でした。第3艦隊は、米海軍の「ホーネット」を撃沈しますが、空母「翔鶴」、「瑞鶴」が損傷、艦載機90機以上を損耗します。この損害は致命的で、のちのマリアナ沖海戦までの約1年半、機動部隊は機能しなくなります。連合艦隊の機動部隊は南太平洋海戦で実体がなくなってしまったのです。そのため、連合艦隊は、攻勢から防勢へと転換したのです。

つまり、珊瑚海、ミッドウェーと戦い、この南太平洋海戦でシー・パワー争奪戦の勝敗の形勢が明確になったのです。

【立川】今、機動部隊、すなわち、空母について話がありましたが、海上における空母同士又は機動部隊の戦いについて戦術的な観点から何かご意見ございますでしょうか。

【石丸】世界の戦史史上初めて、空母同士の戦いが行われたのは珊瑚海海戦です。ハワイ作戦が終わって、昭和17年5月上旬に珊瑚海海戦が生起するのですが、日米両軍の戦果あるいは損害という観点からは互角だったといわれています。「日本は、戦術的には勝利したが、戦略的には敗北した」とも評価されており、大局的には昭和17年6月上旬のミッドウェー海戦の前哨戦として行われたのですが、日本軍の南方進攻作戦に陰りが生じ始めた、いわゆる攻守逆転の一步となったといえます。珊瑚海海戦において、日本海軍は小型空母1隻損失（祥鳳）、大型空母1隻（翔鶴）を損傷、航空機概ね100機喪失しました。その結果、約1カ月後に行われたミッドウェー海戦に大きな影響を与えました。

【小椿】先ほどの齋藤さんがいったことに少し付け加えると、やはり南太平洋海戦の意義

というのは、相打ちではあるんですが、ガダルカナル争奪戦を考えた場合、米軍が優位だった一因としては、米軍がガダルカナルに航空基地を持っていたということです。

その制空権内で米軍は行動する、一方で、日本は米軍航空基地がある島へ輸送船で人員・物資を届けないといけない。日本の場合は、当初、ラバウルとか、かなり離れたところに航空基地があるだけでして（争奪戦発生後、ブイン、ムンダ等にも航空基地設置）、そのため、日本の機動部隊が米機動部隊を撃破できても、ガダルカナル島の基地航空部隊を常続的に圧倒することはほとんど不可能に近いわけです。常続的に制空権を握ることができなくなったということは、もう輸送船を無傷で接近させることはできない、増援部隊や補給物品を送ることが難しいということが明確になって、ガダルカナル島の戦況は決定したというふうにいえると思います。

【齋藤】先ほど言いそびれましたが、南太平洋海戦のあと、11月12日の第3次ソロモン海戦で連合艦隊は戦艦2隻、同時に輸送船11隻を失い、シー・パワーはほぼ完全に米側に移りました。これによってガダルカナル島の陸軍も攻勢から防勢へと転換します。ここが結局、日本軍の攻勢終末点であったといえます。

【所長】この作戦は、米豪遮断ということから始まったという認識ですが、日本の国防という観点から考えますと、日本から離れた地域での大きな目的とはいえないことに対して投じた資源と失った資源が釣り合いに大きかったと思います。

【立川】第一段作戦で非常に成功して、第二段作戦を遂行していくところで、このようなつまずきが生じてしまったということだと思います。

【所長】珊瑚海海戦とか、ミッドウェー海戦を個々の海戦、「点」としてとらえるのではなく、昭和17年の一連の海戦において、シー・パワー的に大きな展開がなされ、それ以降、日本海軍の常続的なプレゼンスが失われたなかで防勢となり、米軍優位の状況で太平洋戦争における構図ができ上がった、まさに、転換点といえると思います。

アッツ・キスカ島と同じように日本軍は、占領しても補給について十分に考えていなかったのではないのでしょうか。

【齋藤】先ほどの潜水艦の話にしても日米で補給についてどうとらえていたかというところにいきつくのではないかと思います。特に、戦争指導上、作戦指導上における海洋の長大な補給（兵站）線に対する認識が全く異なっていたのではないのでしょうか。

5 戦争指導、作戦指導の観点から

【所長】日本軍は短期決戦思考といえますか、米軍は戦鬪の集積すなわち戦争を一連のプロセスと考えるという点において、そもそも戦争に対するとらえ方が違うように思います。

【立川】そこは、戦争指導の考え方において、本当は長期戦で臨もうとしていたところ、山本五十六流の短期決戦という考え方が入ってしまったがために、齟齬が生じたのではないかと思います。

【石丸】根本的に、日本陸軍と日本海軍の考え方が違ったところにあると思います。長期持久戦に持ち込みたい日本陸軍と、短期決戦で終わらせたい日本海軍の作戦方針の違いが表れたように思います。

【所長】当時、統合作戦指導がなかったということですね。

【齋藤】先ほど石丸さんから海軍の短期決戦、陸軍の長期持久戦という話がありましたが、それが崩れたのが昭和 17 年 4 月のドーリットル空襲です。太平洋を放置すると日本の本土が危ないということになり、当初、反対していたミッドウェー作戦、さらには、太平洋に日本陸軍も出て行き、海軍の作戦に陸軍が相乗りするようになったのです。

【立川】日本陸軍は陸上兵力を出さないといっていたのが、ドーリットル空襲が契機となって陸上兵力を出すことになったということですね。それで、作戦自体がミッドウェー島を争奪するということが主になってしまったということです。山本五十六が考えていたのは、米海軍の機動部隊をおびき出してそれをたたくということであったのですが、結局、二兎を追うような形となってしまいました。

【小椿】珊瑚海海戦、ミッドウェー海戦と話題となったわけですが、第二段作戦に含まれているミッドウェー作戦がもし勝つことができたとしたら、その場合は、数か月後に、ガダルカナル作戦は起きなかっただろうといわれています。そういう意味からすると、ミッドウェー作戦の戦争全体に対する作戦としてのインパクトは大きかったと思います。ミッドウェー作戦のあとにどうする予定だったかといいますと、すぐに FS 作戦を実施することになっており、目標は、ニューカレドニア、フィジー、サモアでした。いわゆる、先ほど所長もいわれた米豪遮断にいくようになっています。ミッドウェー作戦が、海軍の第二段作戦の一部ということであるんですけど、南方資源地帯を確保した開戦以降のシンガポールやインドネシアに進攻する南方進攻作戦、海軍でいうところの第一段作戦と比較す

ると、ミッドウェー、珊瑚海、ポートモレスビーもいれますが、第二段作戦は、もう当初から、かなりつまづいていました。

成功した第一段作戦というのは、かなり周到に準備を、陸軍も海軍もやっているんですけども、この第二段作戦とかを見ますと、あまり十分な検討がなされたとはいえない難しい部分があります。一応、開戦前に戦争終末の促進に関する腹案が作成されましたが、これは十分練られたものかという、それはいい難しい、いわゆる確固たる戦略ではありませんでした。

特に、ミッドウェー作戦の時は、軍令部が非常に反対したというのは有名な話で、米豪遮断作戦を軍令部は強く主張していました。このように、第二段作戦に関しては、戦略面、作戦面に、十分練り固められて実施されたとはいえないことが、やはり珊瑚海海戦も含めて、蹉跌の根底にあるというふうに思います。

ミッドウェー作戦に特化すれば、その敗因は、よく指摘されるように情報であったということとは間違いないように思います。米軍が当時劣勢であった機動部隊を効果的に運用するには、情報が非常に不可欠な事項であったからです。一方で、日本側にも多くの問題があったことは知られておまして、先ほど立川室長から発言があったような作戦目的のあいまいさ、不必要な戦力分散、偵察活動の軽視、情報伝達の不備や慢心など敗因につながった事項が多くあります。

いずれにしてもミッドウェー作戦の敗因の多くがカバーできていたとしても、準備不十分な第二段作戦というのはやはり早い段階で蹉跌していたというふうに考えます。

先ほどいいましたように、ミッドウェー作戦終了後、日本軍は機動部隊を中心としてFS作戦でニューカレドニア、フィジー、サモアを目標としていました。しかし、米側は米豪遮断を警戒していたために、すでに日本が予想していた以上の兵力を、これらの地域に配置していたということは明確になっています。

さらに、これらの地域に最も近い航空基地は、当時、ラバウルでした。ラバウルとガダルカナルの間は、非常に遠距離で航空掩護は困難であったといわれていますが、FS作戦でのニューカレドニア、フィジー、サモアは、さらに倍の距離があり、中継航空基地は全くないというような状況でした。ですから、そういうことを考えると、やはり作戦は行き詰まったであろうというふうに思います。

また、日米の機動部隊を装備面で考えますと、米軍機動部隊は、既にレーダーを装備しておりましたので、珊瑚海海戦の時から効果的な防空というものができるといった状況でした。ですから、機動部隊同士が衝突した場合、日本軍から見て一方的に相手を圧倒することは非常に難しい状況でした。

【所長】 ミッドウェー海戦において、日本軍の兵力が圧倒的に優位だったとよくいわれま

すが、決戦航空機だけで考えてみると日本海軍が空母4隻に対して、米海軍の空母3隻ですが、米海軍の空母の搭載機数は多く、ミッドウェーの基地航空部隊もいました。したがって、決戦兵力だけを考えても、日本が圧倒的に優位とはいえない状況だと思います。当時、情報面では、日本軍よりも米軍の方が優位に立っていたことを踏まえると、日本軍の兵力が圧倒的に優位だったという意見について疑問があります。米軍の勝利を劇的にいうために強調しているのではないかと思います。

【小椿】米側の高官は、ミッドウェーに関して、日本は奇襲する必要がなかったのに、わざわざ戦力を分散していたことを指摘しています。

これはどういうことかといいますと、例えば、南雲機動部隊以外にアラスカ、アリューシャンの方にわざわざ空母を2隻出して、ミッドウェー島攻略部隊に1隻、後方の本隊の方にも1隻、空母をバラバラに散らしている。米側は、珊瑚海海戦でヨークタウンが損傷したのを3日間で修理して、急遽、出した。ところが、日本の場合は、翔鶴がやられた、瑞鶴が完全に無傷だったんですが、飛行機部隊が失われたっていう話もありますけれども、出さなくていいだろうということで、出さなかった。そういうところで、慢心といいますか、前提として米側が多分出てこないだろうと予測していたのではないかと思います。いずれせよ、前述したように機動部隊だけ考えても、日本は昭和17年に、いずれかの時点でそのような空母全滅というような状況にならないとしても、航空部隊が損耗して作戦ができなくなり、それにつれて、結果的に、攻勢作戦は挫折していたと思います。

【所長】そもそも、空母の建造計画について、米側と比べると圧倒的に兵力差がありました。昭和17年、18年になるにつれ、どんどんその差が開いていくということは建造計画から見ても明らかですね。

【小椿】日本海軍は米側が本格的反攻時期を昭和18年後半以降としていたといわれています。私はその考えの根拠の一つとして、エセックス級空母が続々と就役するのは昭和18年後半以降であると判断したことだと考えています。ただ、やはり所長がいわれましたように、日本海軍はこの戦争中に間に合った正規空母というと「大鳳」1隻ぐらいですが、あとは改造空母ですとか、例えば、雲竜型の空母というのは、就役が昭和19年後期で、まったく間に合わなかったわけです。

6 情報、暗号の視点

【立川】先ほど、小椿さんから、ミッドウェー作戦の敗因は、情報であるとのこと指摘があったように思いますが、日本軍は情報軽視であったとよくいわれます。まさに、ウクライ

ナ戦争においては情報戦ということが話題になっています。情報という観点から転換点の話とからめて、ご意見ございますでしょうか。

【石丸】情報戦の一つである通信、特に、暗号について申し上げますと、暗号解読の一例として、昭和 17 年 5 月初旬には、日本海軍の暗号書が解読されていたとの指摘があります。その解読率など諸説あるものの、ミッドウェー作戦の全容について、米海軍に事前に把握されていたということです。当時、日本海軍は暗号が解読されていたことに気が付いていませんでした。よく話題になるのは、暗号化された電報で使用する特定地点略語表について、日本海軍は「ミッドウェー」を示すのに、「AF」という略語を使用していました。米海軍は、この略号がどの地点を意味するのか、わざと平文の電報で「ミッドウェーの蒸留装置が故障して真水が不足している」と送信したところ、これを傍受した日本海軍は、暗号電報により「AF では真水が不足している」という情報交換を実施したため、「AF」という略語が「ミッドウェー」を示すことが突き止められ、ミッドウェー攻略の意図が見破られてしまいました。日本海軍は、当然、暗号書等の更新を企図し、準備していたのですが、更新時期が遅れたことにより、作戦準備の電報が米海軍に解読されてしまいました。情報という観点において、これは一つの失敗例として挙げられます。

【立川】今でいうフェイク情報だと思いますが、それが致命的となったというわけでしょうか。

【石丸】ミッドウェーを攻略するという意図が見破られた点では、致命的な失敗であったと思います。日本海軍側において、情報は漏れていないだろう、暗号は解読されていないだろうという思い込みがあったのかもしれませんが。暗号が解読されているかもしれないという意識があれば、防げたかもしれません。

【所長】戦術レベルでも潜水艦の展開が遅れ、米空母の捕捉ができず、機動部隊が空母が出撃したという情報を得られずに行動せざるを得なかったとか、「利根」の索敵機の発進の遅れとかがよくいわれますが、索敵が重要であれば、二重三重に対応すべきであると思いますし、情報への対応の差が日米に表れているという印象がありますが、いかがでしょうか。

【石丸】まさに日米間における情報への対応の差が大きく影響していたように思います。潜水艦を使用した監視哨戒により空母の捕捉ができなかったことは、作戦に大きな影響を与えました。

潜水艦による監視活動についていえば、潜水艦の監視能力は極めて低かったのではないかと思います。目視による情報、音の情報、電波の情報について、期待されるほどの能力を発揮できていなかったものと思います。

【小椿】付け加えますと、暗号とはちょっと違うのですが、やはり情報といいますか、有名な話で、「大和」は米空母らしきものがミッドウェー近辺に行動しているという信号（呼び出し符号）を傍受したのですが、山本五十六は機動部隊の南雲忠一たちに教えなくていいのかといっているのですが、結局知らせませんでした。参謀は、「今、無線封止中である。それから、ミッドウェー基地攻撃隊を機動部隊が発進後は、敵艦隊に備えて攻撃隊を準備することとなっているから大丈夫だ」と考えました。それから、『大和』がとらえたんだから、おそらく空母部隊も敵信をとらえているだろう」というような、だろう、だろうで、情報というものから考えると、その辺は暗号ではないんですけど、情報の配付・出し方と申しますか、その辺が非常に稚拙であったと考えます。

【齋藤】当時、メルボルンに米英豪の連合暗号解読センター（CB）が設置され、昭和 20 年には約 4,000 人勤務していたといわれています。すなわち、情報に対する投資も日米で全く異なっていたと思います。

【所長】米国は日系人も利用して、日本の情報収集にエネルギーをかけていたといわれています。捕虜からも相当情報を得ていたとも聞いたことがあります。

【齋藤】米軍の感心するところは、情報も重要視していましたが、情報は 100% 正確ではなく、情報だけをうのみにすることはしませんでした。

例えば、マッカーサー将軍などは、日本軍の暗号から読み取られた軍事情報「ウルトラ」を使ったり、使わなかったりしました。完全な情報はないのであり、偉大な将軍は、決断しないといけないときに断固決断するといったところに、その存在意義があると思います。この点も日米の差に表れたと思います。

【所長】当時、ダメージコントロールの差ということが大きかったのではないかと思います。先ほどありましたヨークタウンは修理して 3 日後に出撃した、一方、日本の空母は修理できるところが限られている等、日米の考え方の差を感じますが、その辺りはどうだったのでしょうか。

【齋藤】一言で言えば、工業力、技術力の差ということだと思います。例えば、日本の空

母は米軍の 500Kg 爆弾を被弾すると甲板を貫通しますが、米空母は日本軍の 250Kg 爆弾を被弾しても、よほどうまく当たらないと数層の甲板を貫通しないといわれています。

また、消火器についても、日本軍は海水を汲んでいますが、米軍は化学剤を使用している等、技術的にも違ってきます。

【立川】人命に対する考え方や死生観ということにもつながっていると思います。また、ダメージコントロールや補修、ローテーションということに関する認識が薄かったといえるでしょう。すなわち、リカバリーの能力が欠けていたと思います。もし、それが欠けているのであれば、そのことを念頭に戦わなければならなかったのですが、それもまた始めてから気づくということであったのではないのでしょうか。

【齋藤】先ほどの話に戻りますが、米海軍が太平洋のシー・パワーを絶対的にしたのが、昭和 18 年 11 月のギルバート諸島への上陸作戦でした。つまり、島嶼伝いに飛行場を占領しなくても上陸作戦を遂行できる強大な海軍、シー・パワーができあがったのです。これ以降、米軍は太平洋西岸沿いのマッカーサー・ルート、太平洋中央を貫くニミッツ・ルートを日本本土に向かって進攻します。日本陸軍は、この 2 本のルート上の島嶼で防衛を行わざるを得なくなったのですが、この転換点となるのがサイパン島の対着上陸作戦でした。陸軍は、水際での撃滅（水際防御）を追及しますが、たちまち破碎されます。よって、これ以降、対着上陸方式を水際撃滅から島嶼の縦深、地下を利用する防御に転換します。この防御は、執拗に米軍を苦しめます。サイパンでは、概ね日本兵 1 人に対し米兵 0.4 人の損耗でしたが、ペリリューでは 0.9 人、硫黄島では 1.4 人と徐々に損害率が高くなります。米軍側は、既に計画されていた日本本土上陸作戦で予想される膨大な損耗をどうするかを考えます。ここにソ連の対日参戦、原爆投下なども関係してきます。これも一つの転換点だと思っています。

【所長】損害の多さが、米軍が殲滅という考え方になっていった要因であると思います。一方で、非常に時間をかけたことは、日本にとっては、進攻を遅らせるという意味は確かにありましたが、米軍には別の教訓を与えたのは確かに否めないことだと思っています。

【齋藤】日本は、それで米国民の対日戦争意欲が落ちてくれればという期待を持っていましたが、結局、逆の効果を生んでしまったと思います。

7 史料展示に関すること

【立川】今回、太平洋戦争の軍事的転換点になったと思われる陸戦及び海戦についてご発

言いただきましたが、防衛研究所はそういった戦闘に関する史料を所蔵していますね。

【齋藤】実は、6月中旬以降、エントランスの展示史料を変更する予定で、今回の座談会で話題となった、ドーリットル空襲、ミッドウェー海戦、ガダルカナル攻防戦などの貴重な史料を新たに展示します。これは、防衛研究所のホームページでもご覧いただけるようにします。どうぞお楽しみにしてください。

【所長】前回は開戦までの一連の貴重な史料を展示していただき、大変好評でしたので、また、楽しみしております。

8 結 語

【立川】今回は「太平洋戦争における軍事的転換点」というテーマで座談会を行いました。太平洋戦争の転換点というと、今日のお話のように、戦争の勝敗の帰趨という観点から、まずはミッドウェーやガダルカナルが頭に浮かびますが、見方を変えると、それら以外の戦闘も転換点と考えることができたり、また、戦い方といった視点からも別の転換点を指摘したりすることができるようです。

時間が残り少なくなってまいりました。最後に所長にご発言をお願いしたいと存じます。所長、よろしく願いいたします。

【所長】太平洋戦争開戦からちょうど 80 周年ということで、太平洋戦争にかかわる専門家の皆様から大変貴重なご意見をいただきました。

また、シリーズ化していくということで、次につながる議論をしていただければと思います。本日はありがとうございました。

(座談会で示された意見は研究者個人の見解であり、防衛研究所や防衛省の意見を代表するものではありません。)